

大竹市のシンボルマークになつて  
いる鯉のぼり。広報紙でもおなじみのコ  
イちゃんのモチーフにもなっている。  
大竹市をイメージするとき、鯉のぼり  
を思い浮かべる人も多いのではない  
だろうか。子どもの健やかな成長を  
願って大空に泳がせる。そんな鯉の  
ぼりを描き続けてきた人が、引退を決  
めた。まるで鯉模様に移されたような  
彼女の歩みをたどってみたい。

(取材 企画財政課)



# 人生鯉模様。

鯉のぼり、描き続けて半世紀。  
大石 雅子さん

## 半世紀描いた筆を置く―

「トントントン」と階段を上って部  
屋に足を踏み入れると、中央には大き  
な作業台がどっしりと腰を下ろして  
いる。台の表面には赤や黒の筆の痕跡。  
天井からつり下げられた赤い鯉のぼり  
が目を引く。ここは和紙の鯉のぼり  
を描き続けてきた大石雅子さん(85歳  
元町4)の作業場だ。注文をつくり終  
えた部屋は、どことなく寂しげな雰囲  
気が漂う。

半世紀以上にわたって手描き鯉の  
ぼりづくりに携わってきた大石さん  
は、今年限りでその筆を置く決心をし  
たという。何百匹もの鯉のぼりを描く  
のは、想像以上に体力を要する。伝統  
工芸品としての手描き鯉のぼりの技  
を守ってきたが、一日中立ち続けている  
作業は、高齢となった身にはこたえる  
そうだ。

## 引き継いだ手描き鯉のぼり―

大石さんが大竹に嫁いできたのは、  
和紙を商う家だった。400年前から  
小瀬川の清流域で、手すき和紙の産業  
が起り、最盛期の大正時代には、千  
軒を数える生産者がいたといわれて  
いる。鯉のぼりの生産者も昭和20年代  
から40年代初めにかけては、8、9軒  
あったようだ。大石さんも家業のかた  
わら和紙の鯉のぼりづくりを手伝っ  
ていた。ところが昭和39年に鯉のぼり  
づくりをしていた人が急逝。このまま



毎年「手描き鯉のぼりづくり教室」で  
は、多くの子どもたちに、その伝統の一  
端を伝えている。

そうだ。子どもたちの喜ぶ顔が何より  
だと大石さんはほほ笑む。

## 一つ一つ違う表情―

下描きなしで一気に筆を走らせる  
が、何十年描いてきても、「なかなか満  
足できるものではない」と苦笑。と  
りわけ金太郎の顔が難しいという。に  
じんでしまったり、情けない顔になっ  
てしまったり、大石さんからは、その  
表情も一つ一つ違って見えるようだ。  
「あの子に似てるな」と思いつつ描  
き、「かわいく描けたときはうれしい」  
と口もとを緩ませる。

## 伝統をつないでいく―

長年描き続けてきた鯉のぼり。その  
技が認められ、2年前には地域文化功  
労者として文部科学大臣から表彰さ  
れた。しかし、その技の継承が課題と  
なっていた。幸い数年前から大石さん  
のもとに学びに来ている杉本海さん  
という人がいる。東京から広島へ移住  
してきた墨画イラストレーター杉  
本さんに、大石さんは「描き手の特徴



昭和40年代ごろの作業場  
の大石さん(中央)。大型の  
鯉のぼりが干されている。



広島カープ初優勝の昭和50年。  
広島銀行本店に飾られた大型の  
鯉のぼり。優勝が決まる前に大竹  
商工会議所の部屋で秘密裏に製  
作された。

の性質から次第に  
注文が減っていった。  
雨に強いナイロン  
製のものに取って  
替わられ、生産者  
も大石さん一人となつてしまった。

それでも大竹の和紙にこだわり、何  
とか後世に残していきたいとの強い  
思いを胸に、描き続けてきたと言葉に  
力を込める。

## 全国そして世界へ―

時代は移り、住宅事情から5メー  
トルもある鯉を泳がせることが難しく  
なってきた。大石さんは、室内でも泳  
ぐ姿を楽しめるようにと、1.2メー  
トルや1.5メートルの小型の鯉もつ  
くり始めた。これが人気を呼び、民芸  
品としての新たな需要が生まれたそ  
うだ。全国各地からの注文だけでなく  
、海外に赴任する人が持つていく  
などの広がりを見せていった。  
最近もドミニカから、「毎日、毎日出  
て泳がせました」という便りが届いた

が出るよう自分流で描いていいと思  
う」とエールを送る。

伝統の技を次の時代に引き継いで  
いくことは容易ではない。大竹のシン  
ボルともいえる鯉のぼりも、一人の女  
性の熱意によって守られてきた。

そしてそれを支える手すき和紙の  
技を引き継いでいる人たちがいる。伝  
統とは、世の中の移り変わりの中で、  
変わらない価値を見だし、新しい風  
を吹き込んでいくもの。そんな人と人  
とのつながりで、受け継がれていくの  
かもしれない。

大石さんが描いた鯉のぼりたちは、  
今でも日本中の空、世界中の空を、そ  
して子どもたちの胸の中を泳いでい  
ることだろう。



(右) 今年の注文を終え、筆を  
置くこととなった大石さん。  
(上) 道具にはこだわりがあ  
る。愛用した熊野筆。(下) 目  
玉を描く木製のコンパス。



5メートルのひ鯉。毎年、5月  
には市役所や総合市民会館口  
ビーに鯉のぼりが飾られる。